



櫻齋房種画

柳水亭種清作

五人獄苦魔物語

櫻澤堂山編輯

外題之為種筆

二編

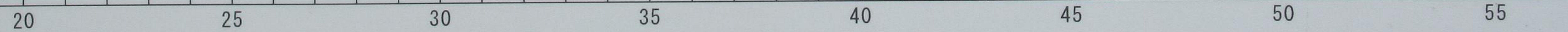
二編

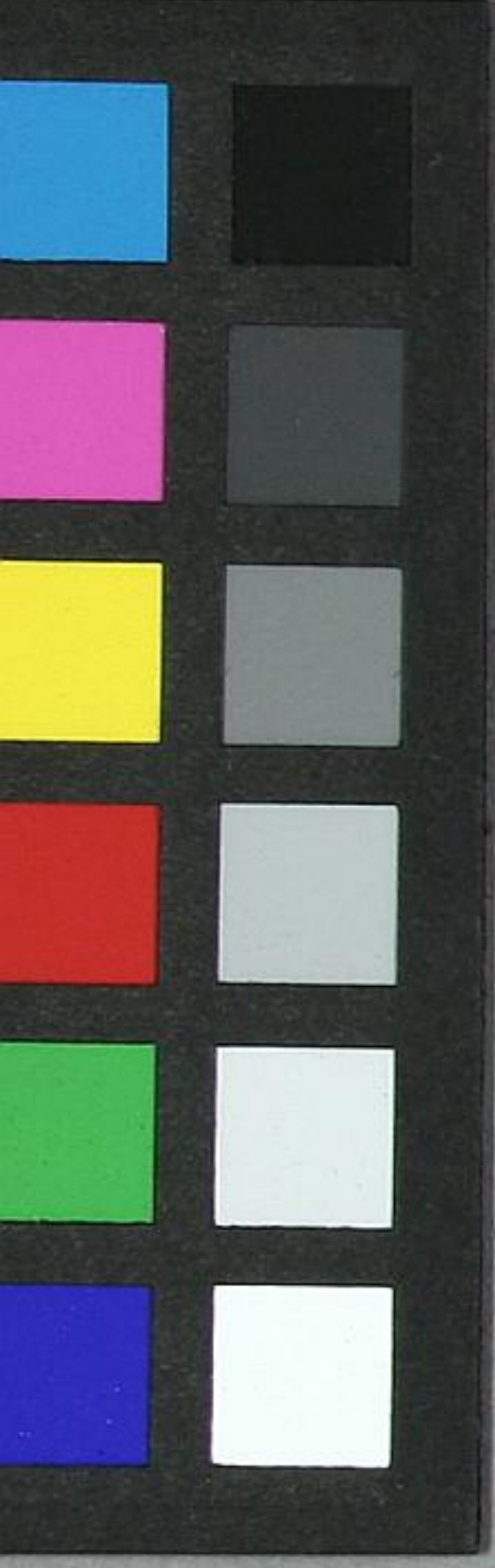
二編

下

中

上





五人殲

此編

上の巻

苦魔物結

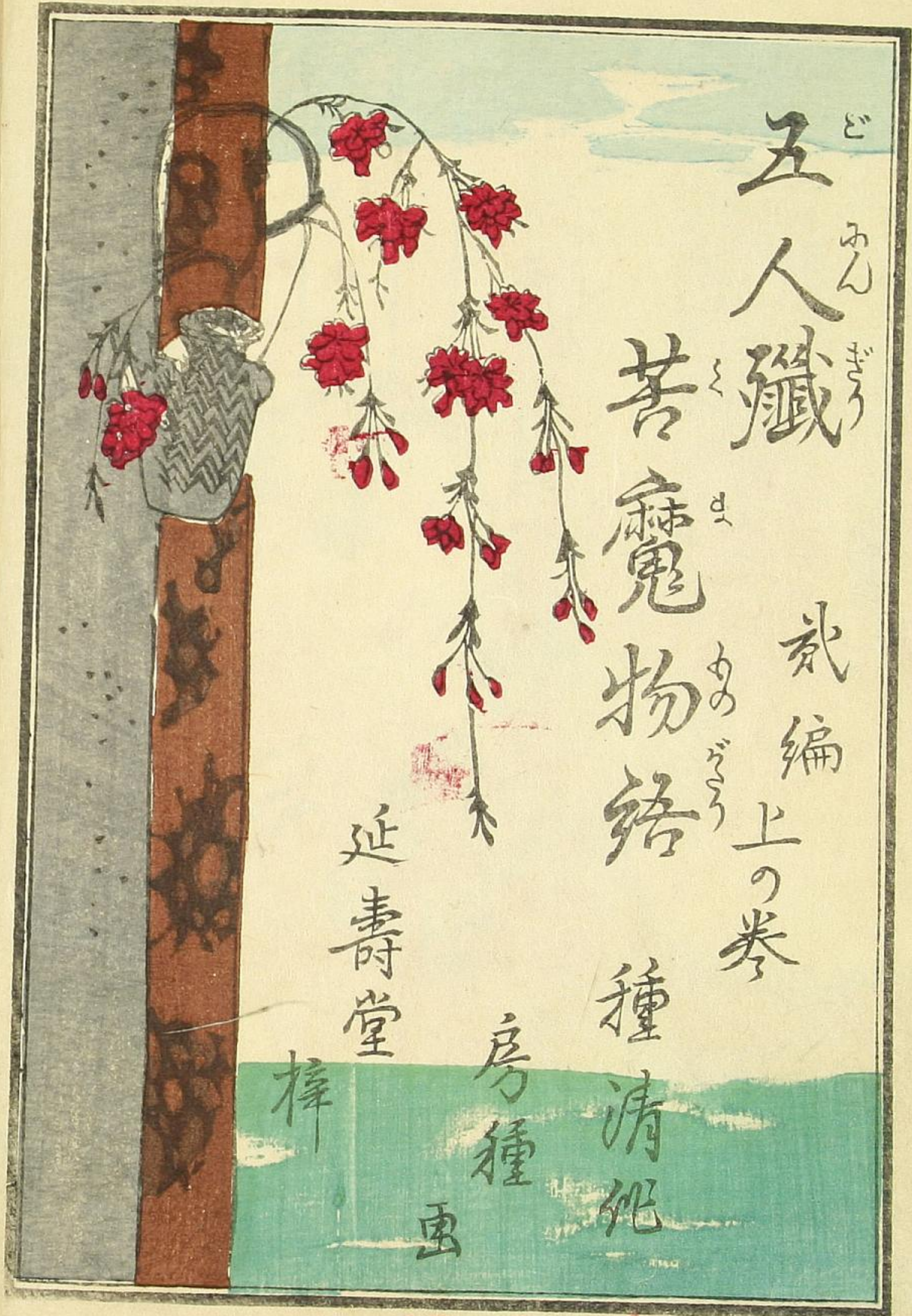
種清化

房種

虫

延壽堂

梓



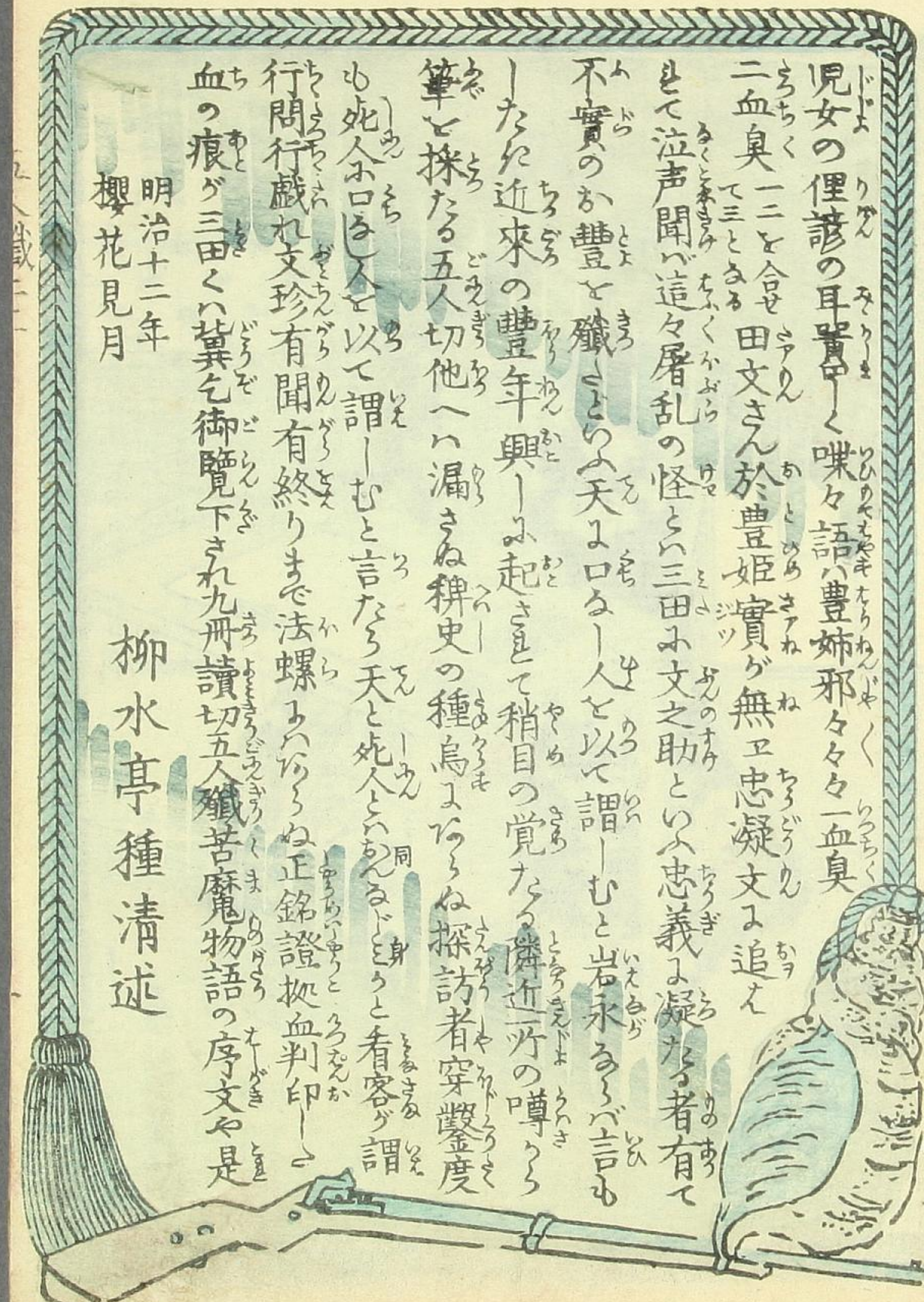
児女の俚諺の耳聾く喋々語ハ豊姉邪々々々一血臭  
二血臭一ニと合意 田文さん於豊姫實ガ無エ忠凝文ニ追々  
とて泣声聞ハ這々屠乱の怪といハ三田ふ文之助といハ忠義ニ凝ル者有テ



不實のお豊と殲とといハ天よ口々一人を以て謂ハむと岩永るるハ言ハ  
したた近來の豊年興ハふ起きて稍目の覚たる隣近所の噂々々  
筆と採たる五人切他ハ漏さぬ稗史の種鳥よらぬ探訪者穿鑿度  
も死人ハ口に入て以て謂ハむと言たら天と死人といハるハ身と看客ヲ謂  
行問行戯れ支珍有聞有終りまき法螺ハ何らハ正銘證拠血判印  
血の痕グ三田ハ其乞御覽下され九冊讀切五人殲苦魔物語の序文也是

明治十二年  
櫻花見月

柳水亭種清述





再出  
吉濱  
文之輔



音接筆筒  
晒間  
息家  
於女  
琴

風雪立  
多時

五ノ筆上



山平也や 女を  
蟻死せむ  
是通の者

晒間の室  
阿國方

○外色美焼あるもの初もまじの徳美と  
生かす外色を怪むは内徳と色  
まるまじも娘母倭徳が魂ふたれも  
縁その徳を他之西施麗形が  
美あるもその徳美と

▲緯も一國不五人通好の意情と  
女にけりんとあふ



今最も愛り  
今更の底事ぞや然其の  
清原の冬本を豊の自己好くも  
奸計小富たるふ交を助が  
あはと技術て奸  
娘と通守しるる

の  
文  
料  
推  
の

つき大害と成りに終  
うの自己の身及び  
まもるべきものあり

あざわりのなる

○又なにも若漢文之助の

悪者輩と漫くと狂まき

別車と備ふてお豊とあじり

自己眼より別あて二十軒のり

銀堂よ出金格格と運煙よか格と茶を

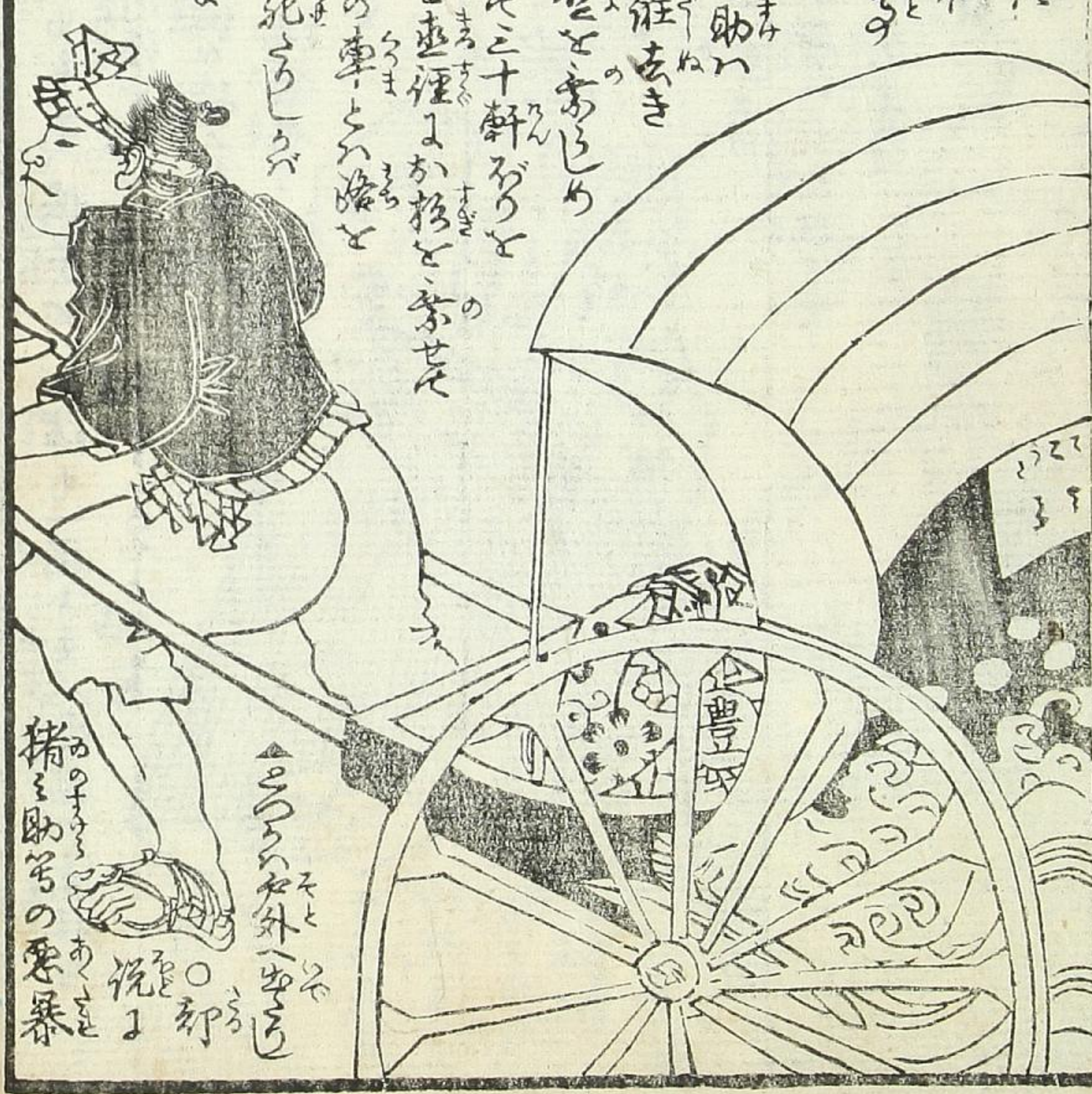
をりたる新若梅の車とあ格と

遠へ一文家小記のり

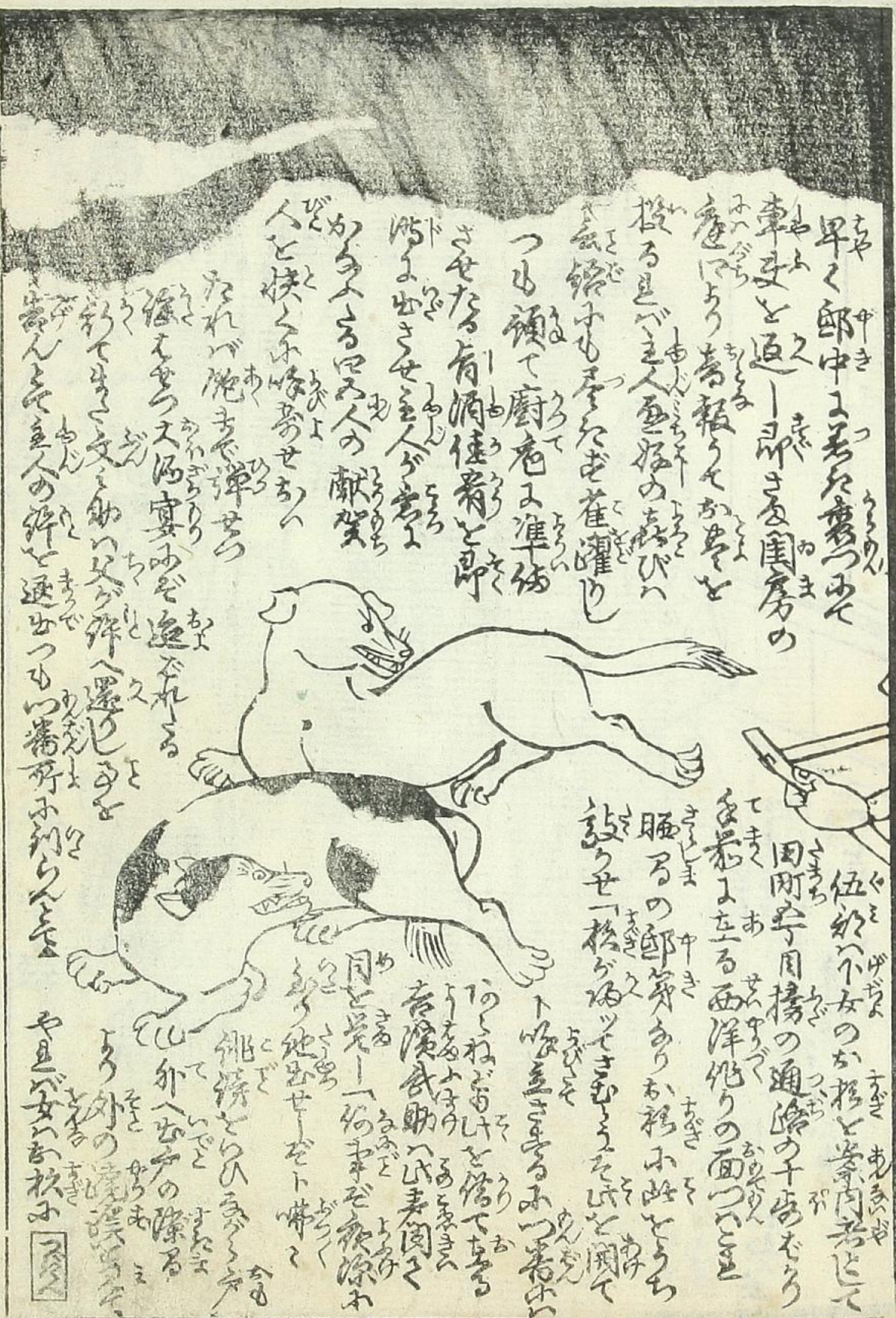
赤羽根をうよ

向の車より

二十分斗り



精進助等の要暴  
○部  
○部  
○部



早く郎中よ若た若つて

車と道一筋さる国房の

倉にあり若報うてお格と

投るは主人を格の格ひ

云格もそを格在格也

つも顔て厨者よ準備

させたる有酒住者と郎

格よ出させ主人が格

かろ人よ格人の献格

人と快く格あせ格

たれ格池を格

格を格又格格格

格を格又格格格

格を格又格格格

格を格又格格格

格を格又格格格

伍の女のか格と案内者にて

田所守用格の通格の十格をう

格よ立る西洋格の面つ

眠るの郎格あり格小此と

格を格格格と

格を格格格と

格を格格格と

格を格格格と

格を格格格と

格を格格格と

格を格格格と

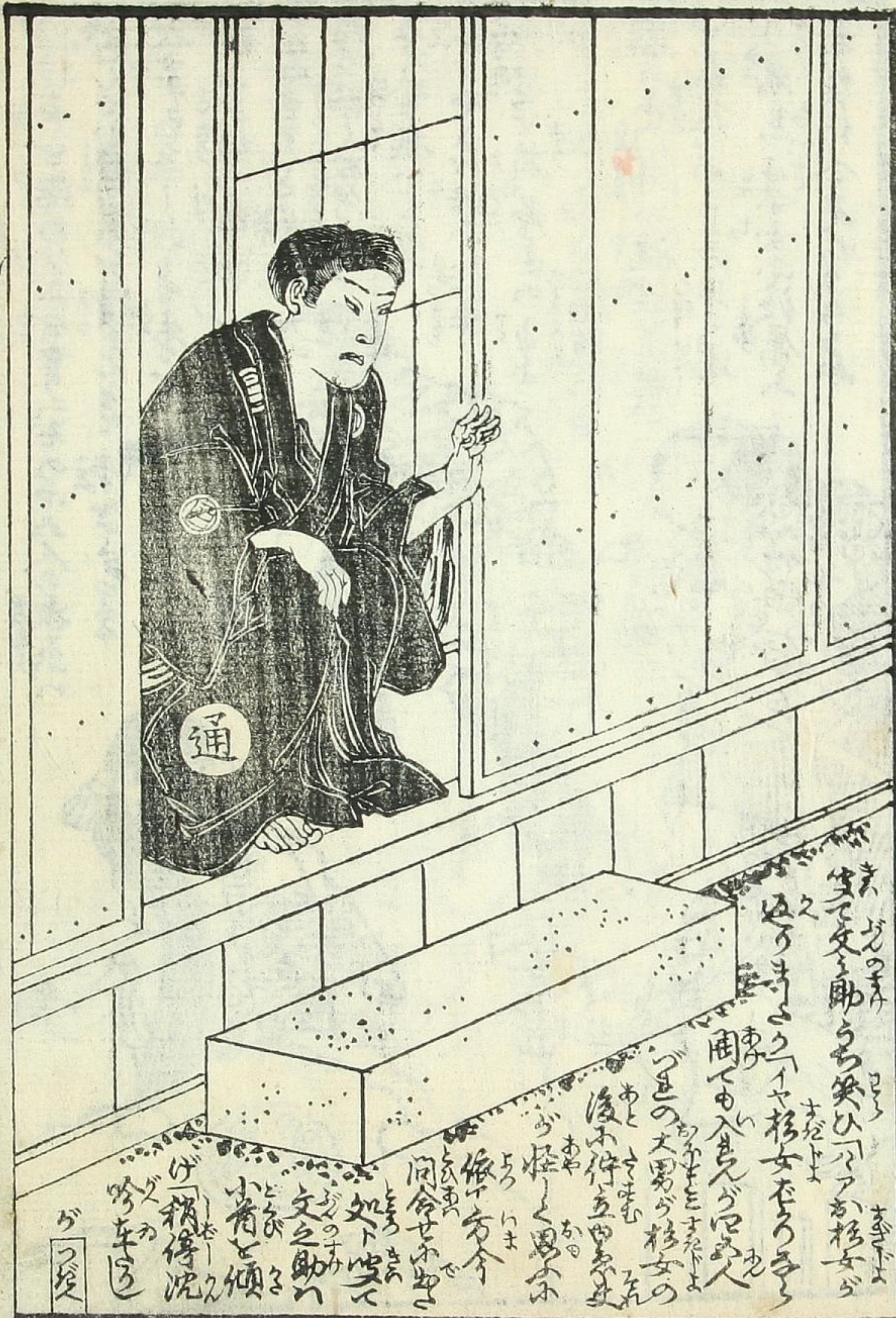
格を格格格と

格を格格格と

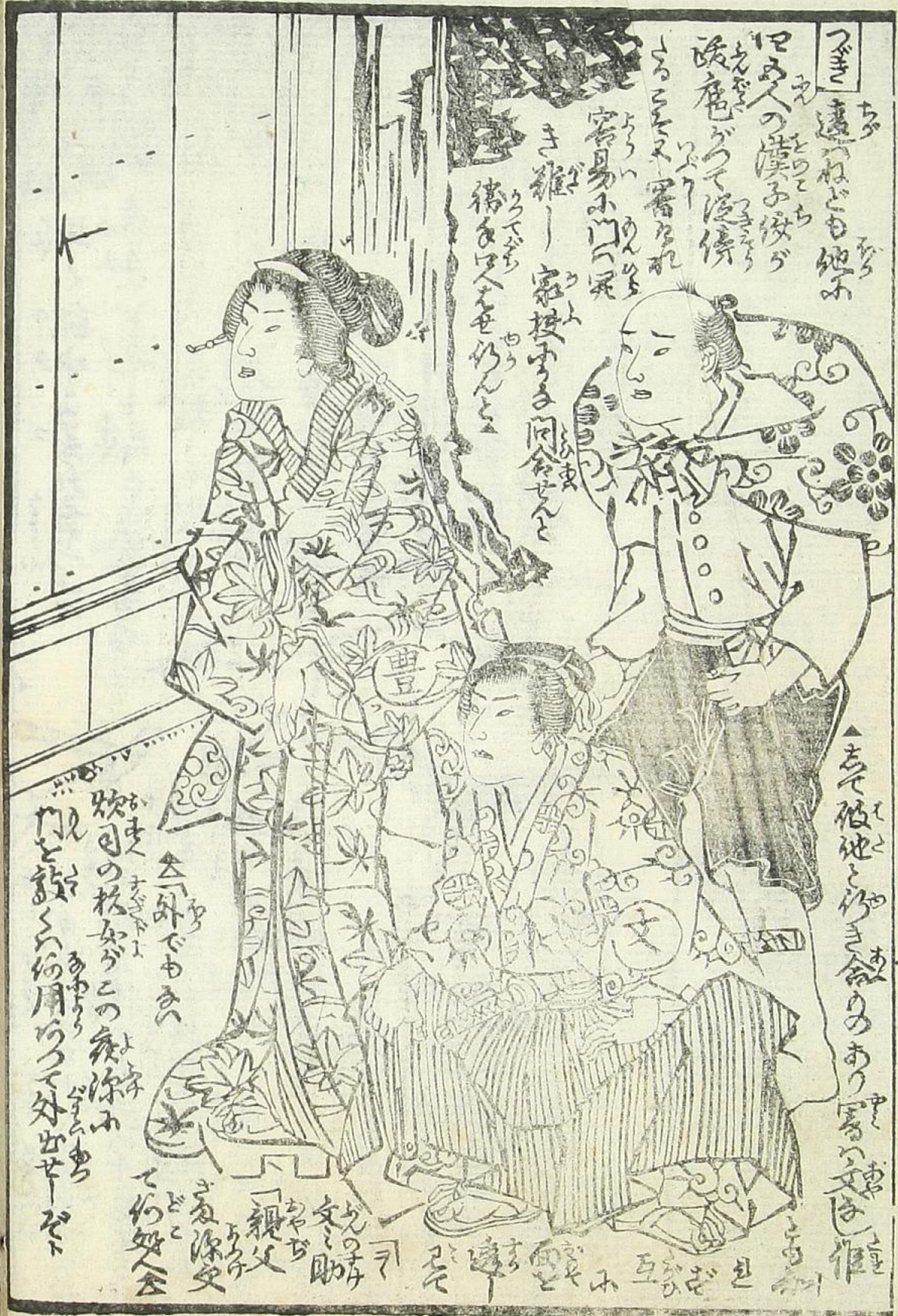
格を格格格と

格を格格格と

格を格格格と



此の男は...  
 文之助の...  
 小舟...  
 舟...  
 同...  
 如...  
 文...  
 小...  
 舟...  
 舟...



遠...  
 口...  
 改...  
 容易...  
 家...  
 徳...  
 吉...  
 文...  
 親...  
 文...  
 親...  
 文...  
 親...



つぎ 夫と潜め父ふ云う「その口に入るの奴も  
 家んでかきとめと攫んとと 攫れども  
 奴輩あるべし此を承るぞ  
 現不天網の通  
 且ぬとらとぞ人  
 たり好く奴等好  
 きを捕へと夢  
 獄をさむべし此を承るぞ  
 悪鬼と刑屋まのるふ  
 悪ん然せん」と捕縛せし  
 密り不門外の脱漢と寝ひ  
 「ヤレおれおれよとぞ早く退  
 り来し其女小使属ふ  
 若後何人ぞあつらふや



ト云ひも新らぬは漢子の声  
 みて「おはしるも用いつと赤羽を通  
 替り一者さうゆらぬ知らば後  
 と働りののつと現彼るより俺們  
 足が鉄刀とぞ一早くゆき  
 好賊と追捕ひ  
 よやく此  
 今をば又女を暴  
 流がゆらる目海見て此へ来ると  
 覺えたるゆゆあるつと奴等  
 女寡の如きは素所人乳暴  
 横へといふ者之声を  
 ぬまると此方の幸なと片端ぬ

見むと門者お  
 り捕索而  
 點極と  
 好捕ぞ其  
 松  
 又  
 金  
 武  
 松



つぎはふふを  
 狭く不潔一馬を  
 小て角門に開くと  
 速くや遅くは猪  
 助が突然と正  
 魁へ進入るや文  
 助の袖袖と空  
 止め「コハ後藤の働  
 り収るは後藤信長  
 の意どくもねと  
 助援て此は送末  
 なるとありは先もねと  
 各小進遠然りして  
 のちふふ何らふが



本門者のまにまに  
 らの初つと律おア  
 ねの初  
 信長  
 ポニア  
 猪助  
 兄さん  
 此の郎  
 中へ



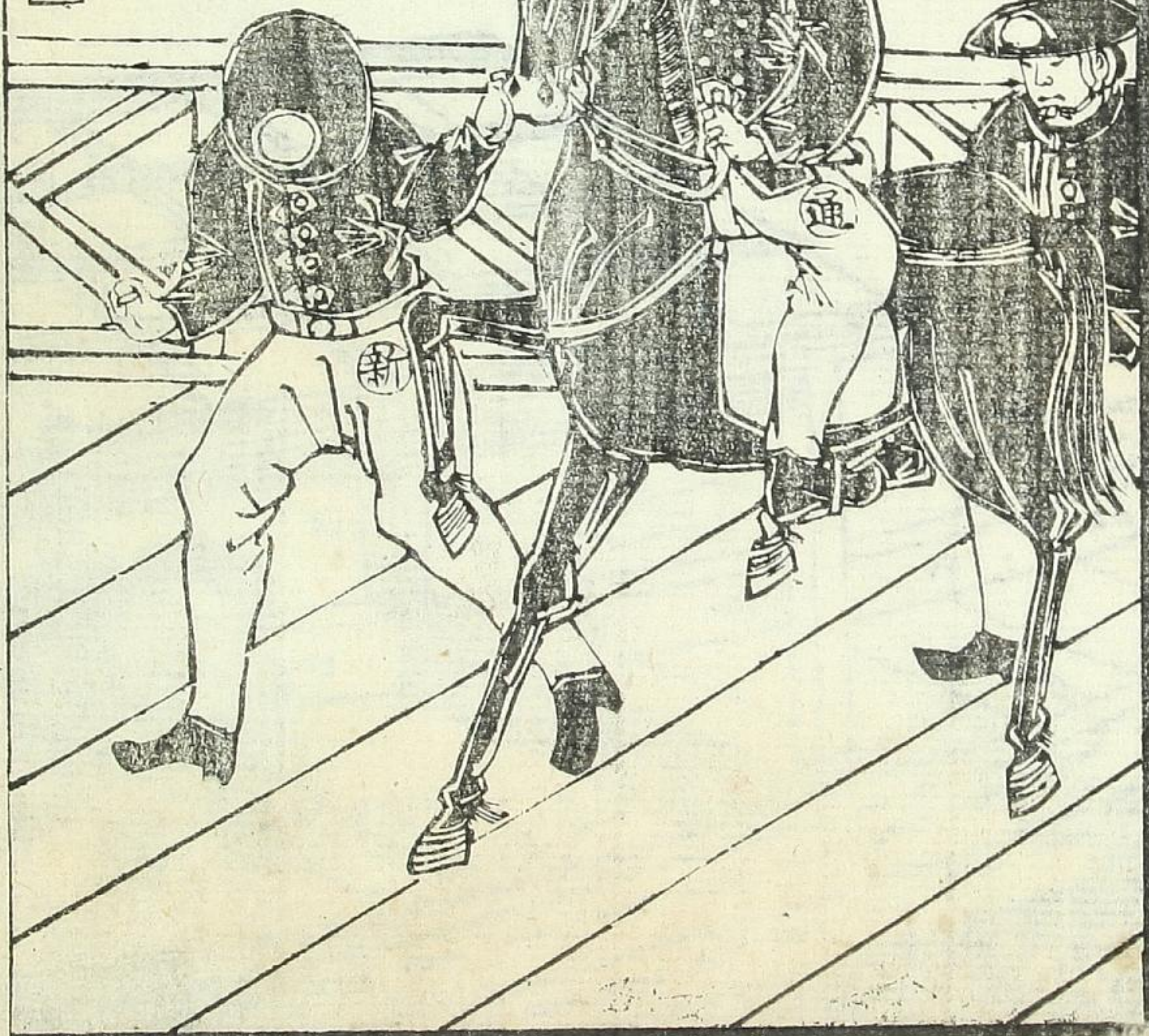
門外りてのふふを  
 送る番けいあまだて  
 壓倒けはが正魁み  
 入り突とーハ

▲ぬりもふふを城の  
 拳動無法と做さそのかまの件搭  
 りはふふとふいせもふふとふふと

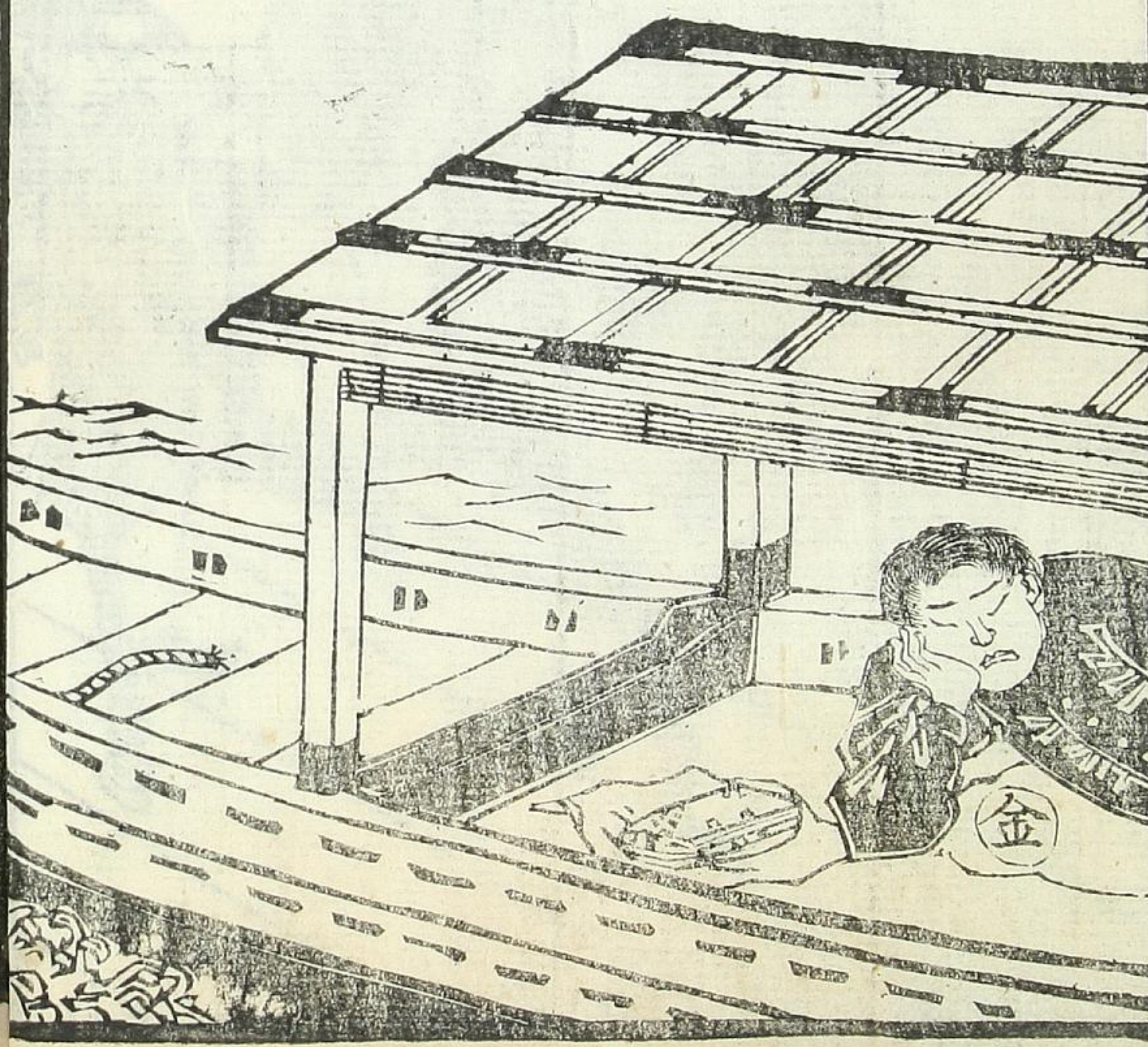
つき 来さうろそを返す  
 か 菊このごはのみの  
 り 美とらふろ速く  
 文 助と実光一  
 猪 女のくえ性くんと  
 ま とををわす  
 女 助の袖織と  
 控 るより早く猪と助  
 の 角領へ男となつ  
 免 けは例と足上  
 小 治ま又死込  
 む とと息も全トク  
 祭 例ま其と見る  
 よ り父武助も一個の  
 奸 者と相揚げさる文



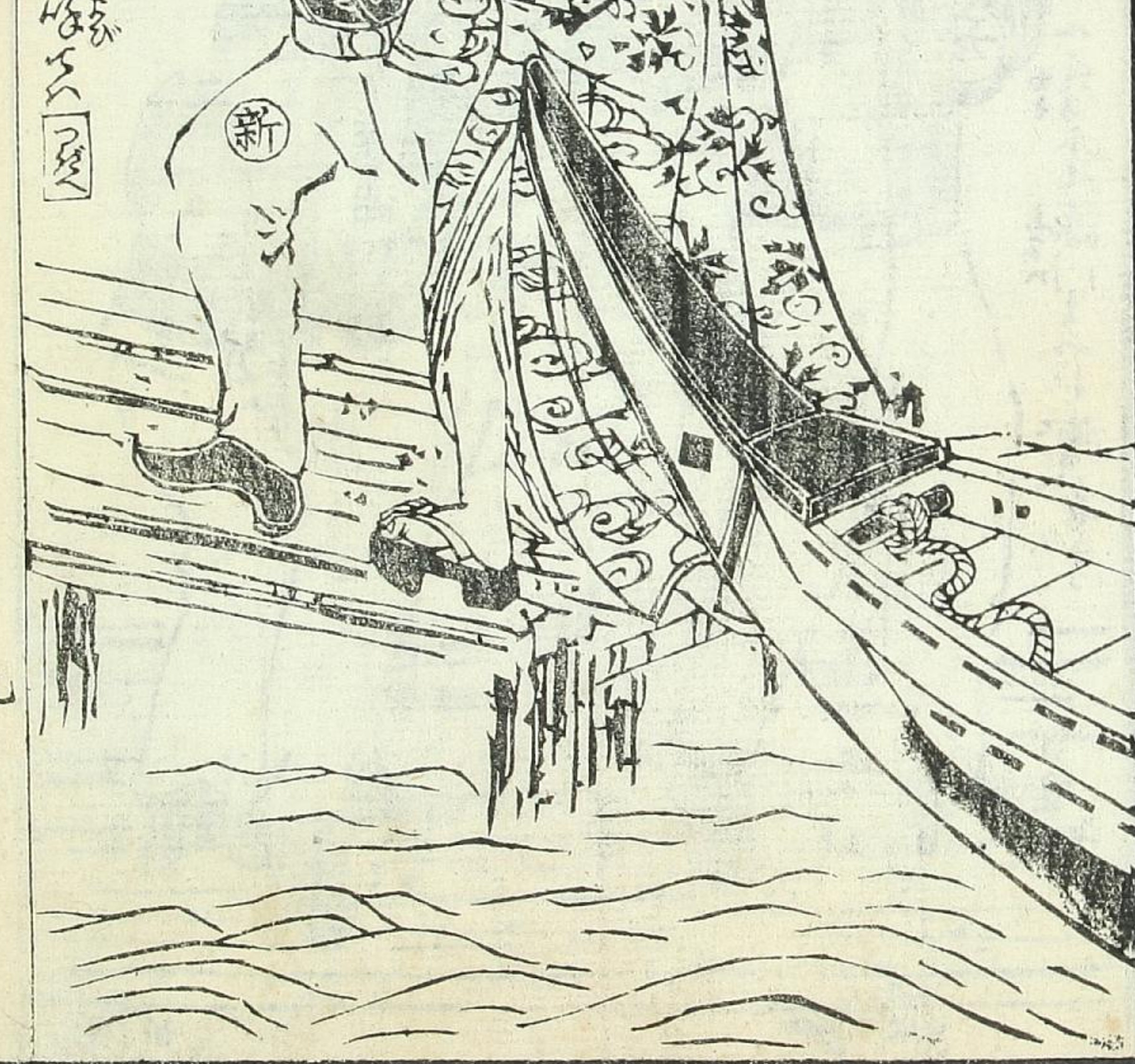
の 助のく捷くも三人まで  
 母 介と現ふ平索の猪  
 髪 ぎその後猪をふ察  
 ぎ 金たしう是も  
 徳 仁ののみまは  
 夜 の月けぬるふ  
 紋 ちさう  
 ○ 初て脇間  
 通 好のかわひ  
 の 文の紙く福  
 き て専を最  
 籠 のか豊と骨  
 尾 長くを後み  
 途 へ投は月夜  
 と もと海楽を



つぎ 毛の天狗の  
 長のどくやま  
 九万里の神楽と  
 張る大鵬の  
 牛を大鵬の  
 志の消小紋  
 と費用教して金  
 洗産して金  
 山系減まるた  
 中く大地をう  
 一年とさまう  
 家内のがさ  
 笑くぬぬ  
 長るか豊  
 うち小彼  
 通好小



竹えうくま  
 願を注ぎて  
 僕彩衣を使  
 かの邸上の  
 全山といふ  
 通好の  
 代をり  
 先代  
 出入  
 中つ  
 ろつて由  
 ろつて由



つぎおびおをせさせら  
 こやまき 此を後よてい名を呼を  
 勝ありてそありやくと  
 称候へぬ今日ハ明治  
 八年の八月十五日あり  
 乃ダ此中死の者  
 別よてあが星の  
 八幡へ賽れまらる  
 ありらふい候勝をふ  
 お豊が豊負の  
 大五郎辰屋彦  
 三郎と曰人連  
 小て曰候お通んて  
 全杉梅を執り  
 ぬー此よりやねをせ



雀ふて深川まぞ鶴がせら

小倉山 昔日新話

泉竜馬是正作  
 初編ヨリ追々出版

青樹榮  
 徳川家の旗下の青木弥太郎小倉菴長吉唱技  
 兼ハ小春情小事寄景借強談の悪事青木の細石難  
 事苦よと記一繪入の甚及紙綴りされハ近世の珍書あり

白縫物譚

初編ヨリ六ノ一編ヨリ成  
 故人種員稿録彦作  
 系板菊寿堂主人富令  
 日之新書社主之後編と  
 出板するに際し  
 月氏ももた松店  
 余入引つぎ世教を  
 陸續の家と飲ん  
 明治十年 板元教貞

假名手本忠臣蔵

露光作  
 芳虎画

延壽百人一首

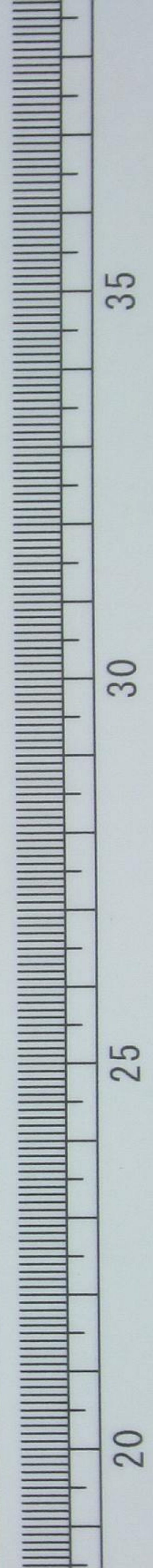
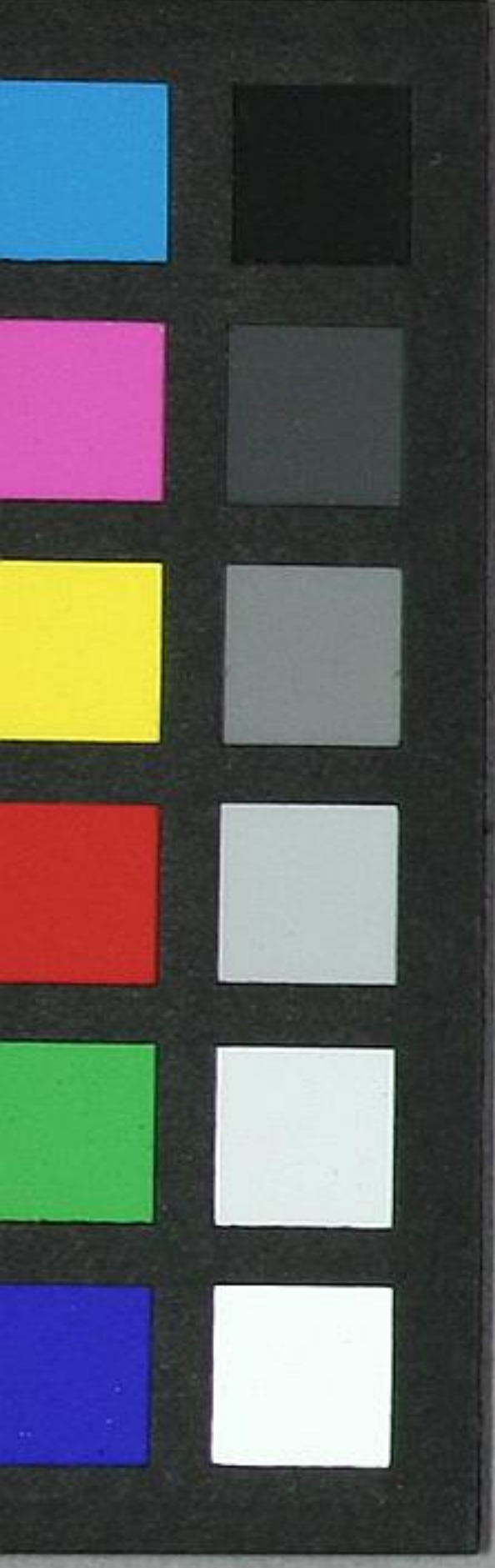
中本一冊  
 王蘭齋画

地本錦繪問屋

延壽堂

日本橋通三丁目四番地  
 林九屋次郎板元







上の巻か 預てかきいば柄あることまじは被と

みりわのそとほろは腰まを  
まよよ 不祥をせえ免角まる  
まよよ 海川あ彩地の  
白木不舟と若の若位

いこま陸へくろん  
とまろみふ系  
欺能しとこまは被

腰の金山い流然  
まろく せんじても まろん△△  
まろく

まろく  
まろく  
まろく  
まろく  
まろく



女人 ぎうご

苦魔

物 ぶらぶ

礼 編 中 糸 春

権 海 綱

房 種

虫

延 壽

堂 板

とちうとていふも  
 此の世は一向もきよきものにてきつて後由  
 知らばあつたつりかきつて人の心を挫き一先ても  
 是の世は八幡さるへいあつたれまぬ  
 此の世はしつておれらせらるゝとていふも  
 世も隆へ退く自の情地を好む  
 自紙入とて金も天老の侍へ  
 衆とて空に散る振は枝かた  
 衆よしとて異一を  
 ○此月お豊がまゝとて切めて  
 富が岡へ流れたるの神お  
 洋れまるあつたつとていふも  
 衆との二層は好まよとていふも  
 圓のて戒と釣るの業たつての行と  
 細くあつたつ諸今日の務者へ平清あ



△山あつたつての衆を  
 聴く  
 又あつたつて  
 此の世はしつておれらせらるゝとていふも  
 世も隆へ退く自の情地を好む  
 自紙入とて金も天老の侍へ  
 衆とて空に散る振は枝かた  
 衆よしとて異一を  
 ○此月お豊がまゝとて切めて  
 富が岡へ流れたるの神お  
 洋れまるあつたつとていふも  
 衆との二層は好まよとていふも  
 圓のて戒と釣るの業たつての行と  
 細くあつたつ諸今日の務者へ平清あ

△此月お豊がまゝとて切めて  
 富が岡へ流れたるの神お  
 洋れまるあつたつとていふも  
 衆との二層は好まよとていふも  
 圓のて戒と釣るの業たつての行と  
 細くあつたつ諸今日の務者へ平清あ

△此月お豊がまゝとて切めて  
 富が岡へ流れたるの神お  
 洋れまるあつたつとていふも  
 衆との二層は好まよとていふも  
 圓のて戒と釣るの業たつての行と  
 細くあつたつ諸今日の務者へ平清あ



△此月お豊がまゝとて切めて  
 富が岡へ流れたるの神お  
 洋れまるあつたつとていふも  
 衆との二層は好まよとていふも  
 圓のて戒と釣るの業たつての行と  
 細くあつたつ諸今日の務者へ平清あ





△お助ちやんちの〜下 振る  
△お助ちやんちの〜下 振る  
△お助ちやんちの〜下 振る  
△お助ちやんちの〜下 振る  
△お助ちやんちの〜下 振る  
△お助ちやんちの〜下 振る



ふき 更み笑ひおせねば金山も今  
真もさめ服よう好ある戯さもいさだ  
沖の白鷗の五葉くみ波の千夜  
万化をば様とて世の

△お助ちやんちの〜下 振る  
△お助ちやんちの〜下 振る  
△お助ちやんちの〜下 振る  
△お助ちやんちの〜下 振る  
△お助ちやんちの〜下 振る  
△お助ちやんちの〜下 振る

お助ちやんちの〜下 振る  
お助ちやんちの〜下 振る  
お助ちやんちの〜下 振る  
お助ちやんちの〜下 振る  
お助ちやんちの〜下 振る  
お助ちやんちの〜下 振る

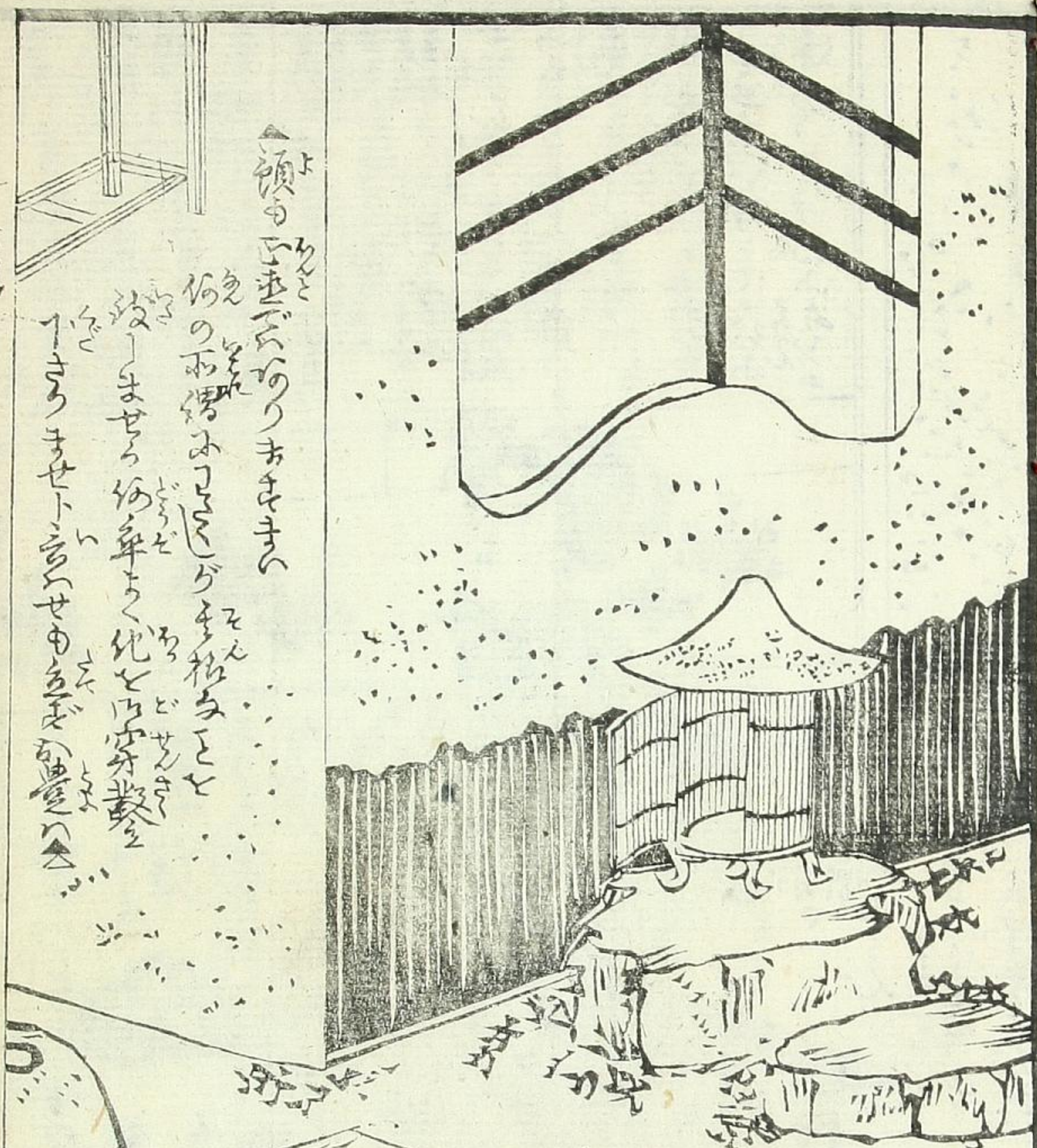


△お助ちやんちの〜下 振る  
△お助ちやんちの〜下 振る  
△お助ちやんちの〜下 振る  
△お助ちやんちの〜下 振る  
△お助ちやんちの〜下 振る  
△お助ちやんちの〜下 振る

今山さんが様々とお遊覧の  
 戯談せま返しては果下遊覧  
 作色  
 今山さん  
 け紙入百両  
 金の入目  
 今山さん  
 け紙入百両  
 金の入目



今山の畑屋と抱て弄と暴ら平目と眼し  
 磯やあつと継継や馬籠のきりけり  
 今山さん  
 け紙入百両  
 金の入目  
 今山さん  
 け紙入百両  
 金の入目



顔も  
 何の雨  
 今山さん  
 け紙入百両  
 金の入目

今山さん  
 け紙入百両  
 金の入目  
 今山さん  
 け紙入百両  
 金の入目



ふき

新主人  
松

かきさるうかやう  
金の盗人の金の山より  
介由あるうかやうを放おせと  
のさかあが金場のとも知らぬ  
小用さるはと町をさるる



あつた  
正と各候の  
決りてさせ  
さまねけ家  
のしほの家  
かあつた  
り雀の  
まはるわ

さるるイヤヤまふあやう  
寛の罪と人お負はまるはよ  
あの家のお住候令その金  
身小属ともある  
傾て万あふも  
増さる天符  
とあつて  
逐るの

その  
身と  
減亡  
まふ  
あつたその家の  
たりの情あつて  
お家のともふ



あつた  
お腫とつてまふ  
のあつ一寸ゆけ  
ののり  
サアして  
地  
お腫とつてまふ  
のあつ一寸ゆけ  
ののり  
サアして  
地

つき けりやうんを  
 お参りなす金山がそを金と何の両つ  
 小返海まる頼もそ方ガ盗まん  
 ままへつと通好突と死ある  
 お参りや着顔とふらふら  
 推へ金山も赤鬼  
 傍てを好う巻と  
 抑止マレ何もの金と  
 くの善うぬや人下被極  
 ともありぬたす何年免  
 と金山頼り方の方へ免  
 入るをを好お豊も流て  
 好うぞこの看ハ流まるま  
 金と吐きせんと空む



金山が  
 吹せんとは度  
 通好金と修  
 あのお参りとそ修  
 りしお腫と黒のト  
 理とを云とつ  
 小孫むとと  
 治お参りと  
 のつ源国  
 段けるは  
 半のねあ  
 金山が  
 お豊



金  
 是後愈  
 せん  
 下男  
 餅の園う湯  
 茶一杯お参り  
 腕る者おと  
 腰られと修  
 金の中ふお杉  
 お助

つき仮令をききよも主人の掛  
 御下とやいふもあはれ  
 目とあひて月お二  
 合世  
 とあひ  
 おあはれ情  
 と安敷  
 める  
 湯屋金おあはれ  
 ととあはれもアラ不便あること

おあはれ  
 御下とあひて  
 目とあひて  
 合世  
 とあひ  
 おあはれ情  
 と安敷  
 める  
 湯屋金おあはれ  
 ととあはれもアラ不便あること



かたききか  
 後助  
 友よき  
 通あはれ  
 迎あはれ  
 させの  
 てあはれ  
 御下  
 金おあはれ  
 一封の  
 突あはれ  
 さあはれ

かたききか  
 後助  
 友よき  
 通あはれ  
 迎あはれ  
 させの  
 てあはれ  
 御下  
 金おあはれ  
 一封の  
 突あはれ  
 さあはれ



外面の  
 方と  
 看後

外面の  
 方と  
 看後

# 算法并用文證書類品々

## 草及紙類一代記讀切本類品々

事 明治太平記 村井靜馬著 伏見より熊本まで至る十五編  
鮮齋永濯画 十六編より鹿見島に至る

○初編の伏見戦争と始め... 野東慶山焼討... 其外神一  
新案の事情明細に記を居る... 人情開化一日...  
平かな付繪... 婦女子... 綴り書あり

書肆 問屋 延壽堂 小林鉄次郎板元  
日本橋通二丁目四番地

書業ちのこと

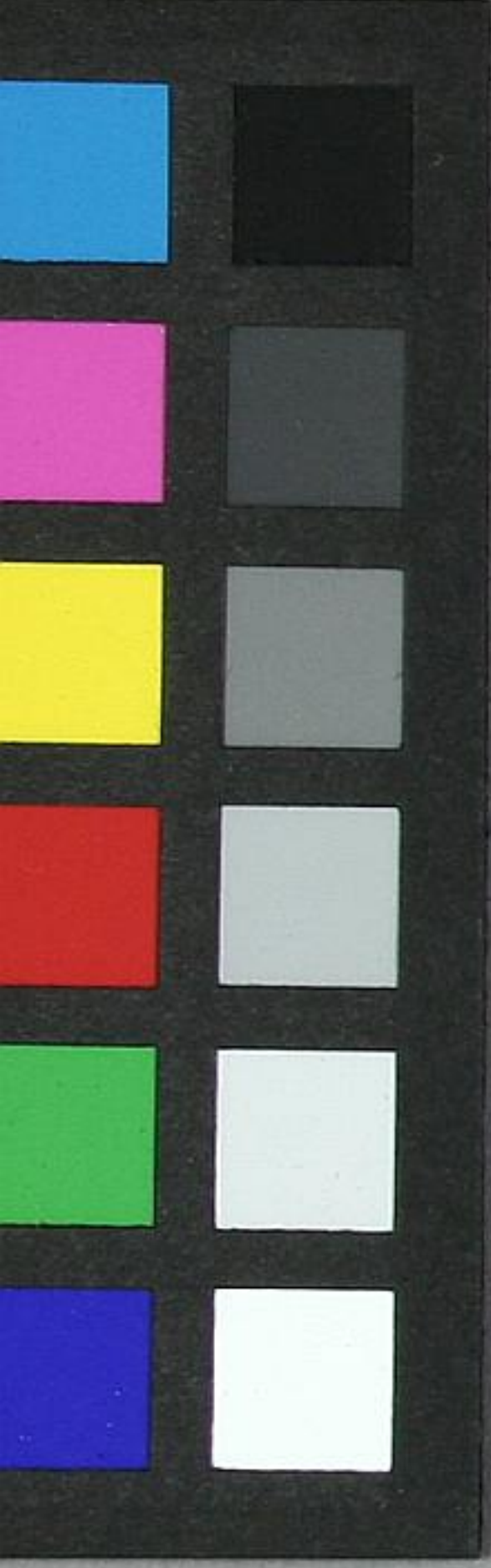
と... の...  
... 方...  
... 大...  
... 下...  
... 切...



此... の...  
... 地...  
... 小...  
... 不...





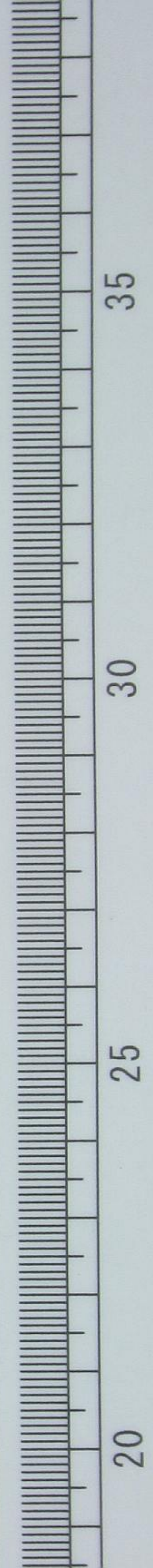


櫻齋房種画

柳水亭種清作

二編

下



20

25

30

35



中巻

儂へ舟よりの方先の月より大府まで良医の  
 業治も効験多く次舟に乗る難症の眼青も知  
 るも果ては生半間家船儀でも母子のそへ  
 るりくみ切てもおはぬ魚脈の結を金目取  
 と恩に程をまてて疾の目も  
 合えぬ母の心を組込にかまほろる  
 来らるるさう遊でありとをむ

またまを直と  
 儂むらりすと泣  
 作はる可物何れや  
 母さぬのか後と

不孝の形と  
 見せて

世は  
 金目取  
 金目取

あ  
 め  
 め  
 め

五人きうり

う満まら

いりるる

お海

いりるる

か  
 め  
 ち  
 な

多珠清

海輝

ふきと種  
 虫

いりるる

お板

「さういふ小石の  
 赤い糸もあつた  
 赤い糸はせしむ体  
 らやいほれおそ  
 ちまをいふも  
 ちまの大病とあ  
 りふと上へ預けて  
 彩霓のいふは性  
 命のいふは情と  
 事と脱きて性  
 い如き下決るる  
 遊い元より知つて



△小石小  
 赤い糸もあつた  
 赤い糸はせしむ  
 ちまをいふも  
 ちまの大病とあ  
 りふと上へ預けて  
 彩霓のいふは性  
 命のいふは情と  
 事と脱きて性  
 い如き下決るる  
 遊い元より知つて

ある三回と乾  
 へ横きつて細坂  
 とよ切の  
 三つ目の  
 こそ母の  
 家あるやと急  
 ぐんねりく目も  
 赤い糸もあつた  
 赤い糸はせしむ  
 ちまをいふも  
 ちまの大病とあ  
 りふと上へ預けて  
 彩霓のいふは性  
 命のいふは情と  
 事と脱きて性  
 い如き下決るる  
 遊い元より知つて



△赤い糸もあつた  
 赤い糸はせしむ  
 ちまをいふも  
 ちまの大病とあ  
 りふと上へ預けて  
 彩霓のいふは性  
 命のいふは情と  
 事と脱きて性  
 い如き下決るる  
 遊い元より知つて



つき  
 中  
 三と  
 懼ひて  
 きて母の困房  
 小ぞ憐ひたる  
 かぬいそと  
 又より  
 病者  
 志は死揚り  
 一くぞ言病り  
 怖とぞふまへ給  
 えりか下けるさ  
 ま  
 よか糸の如とされ  
 心ヲ思ひ残さ  
 りもあ



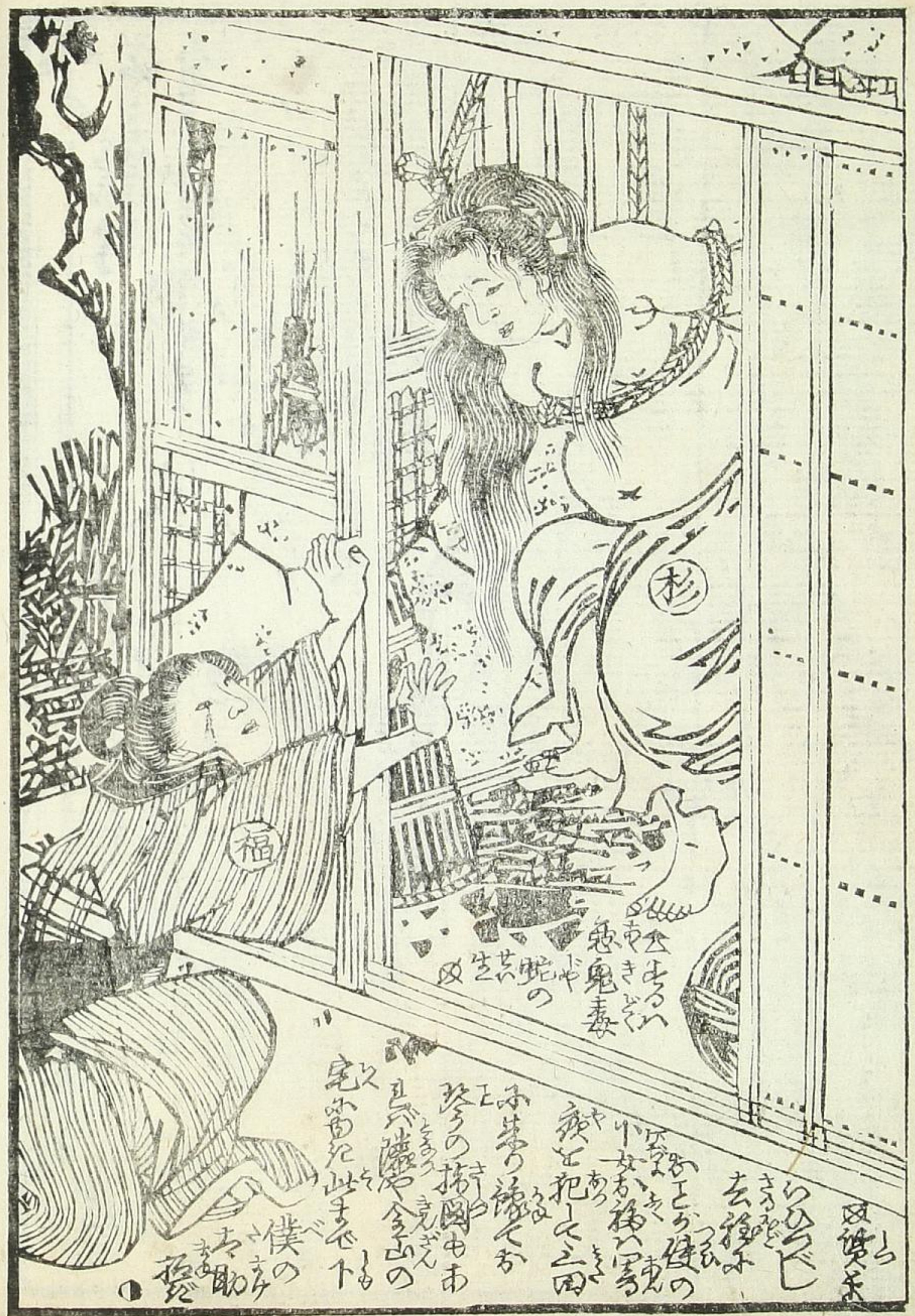
持  
 ぞと森原洞  
 あをしの止まを潜然たり  
 杉をか終らけに有茶多小  
 藤く押籠らるる食膳さ人殿さぬと  
 金山の粉物と物落るふちほはまま  
 朽臓さのやちままく愛ふお杉の  
 ことと善那女の世者者ふ  
 世帯の如うねとまはひ  
 の心世ののちのほふ  
 しん持の素教さ  
 ろうも命とまゆ卒  
 とを救ひ物にやりとい  
 らふよ  
 病の平小床ゆやま  
 看病あらるるさきり備置る日の

杉  
 豊  
 下田の廻り  
 所願  
 するの  
 や  
 き  
 か  
 杉  
 と  
 連  
 り  
 小  
 ふ  
 じ  
 ら  
 う  
 又



ふまきのつて身代りとし  
危急のふとと彼け  
其かぬふり豊かなり  
月しるるはし  
自にがに痛くはけ  
とを有敷  
杉も知ら  
やうるたけ杉暴  
樟葉れが杉の  
みふ赤裸の炭盛の葉よ  
一日三夜のる均作の苦痛と

太  
深は摑し  
くろしと助と杉と深の葉と杉と杉を世に  
杉女の幸くも破力一杯肥腸却り杉が次へ  
る小物  
杉小物  
赤裸の  
痛  
山盛の炭  
破力一杯  
肥腸却り  
杉が次へ



杉  
福  
悪鬼毒  
生共蛇の

わのい  
去後不  
あとの後  
小女杉の  
疾と犯との  
ふきの後  
杉の折  
具杉  
宅小物  
僕  
杉

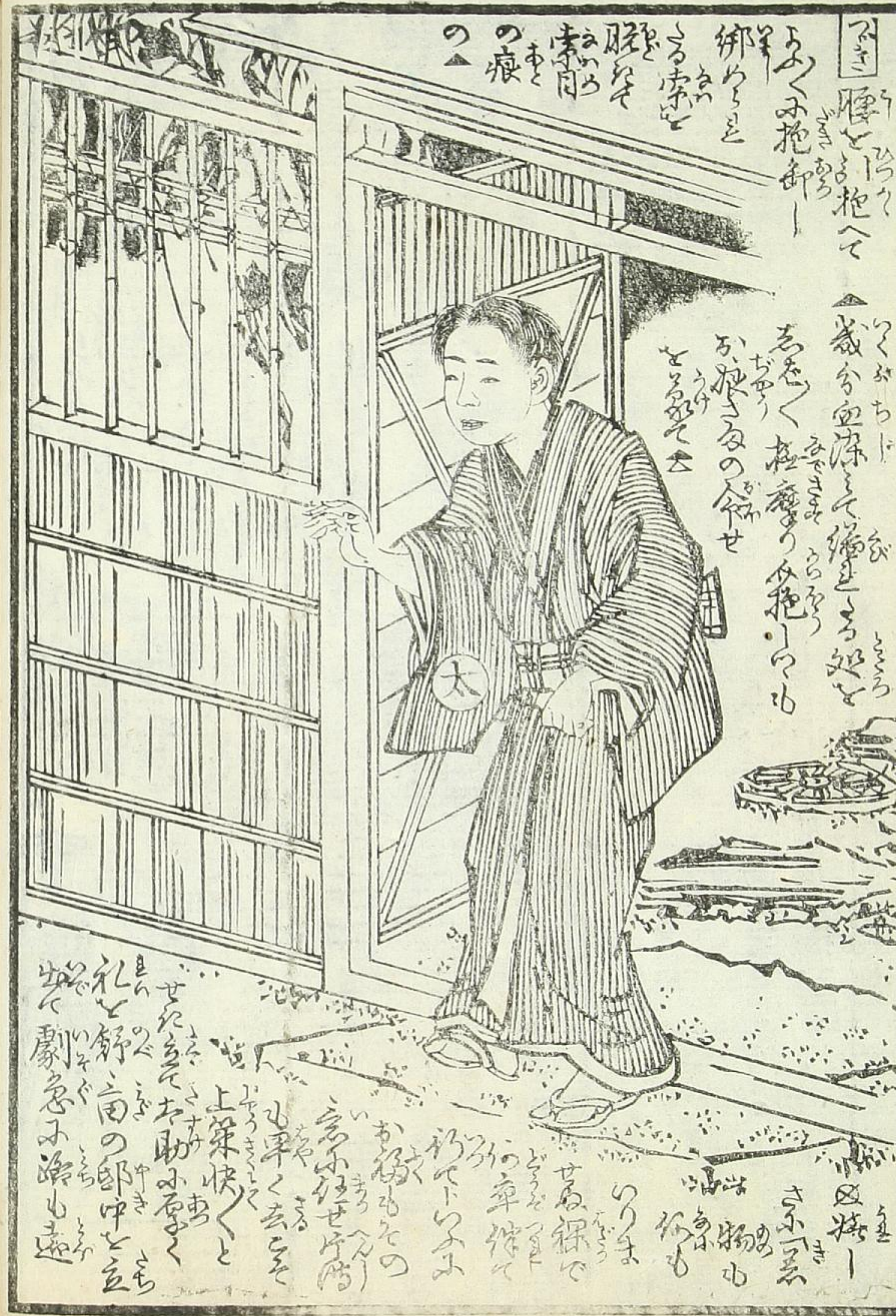


五ノ巻下

去後ふて侍て  
未と

綱坂のくさふかむふか箱の側  
 うのささごお杉お着る衣類の  
 みけはふめゆいせんとあかさま  
 か杉の妻さるか娘さるの百坪へはくぬ  
 深き  
 思ふ程  
 縁の  
 福  
 杉

五ノ巻下



腰と抱へて  
あくみ抱へ  
縛り  
赤  
の痕

歳分血凍とく締まる知  
志をく極度の女抱りゆも  
お抱りぬの命せ

八  
 さふ系  
 物  
 のりま  
 甘麻探で  
 ら年徳  
 杉の  
 お杉もその  
 杉小住せし  
 杉果く云こそ  
 上策快くと  
 せにたそお助小原く  
 杉と杉南の郎中と立  
 杉劇急小治も遠



二月廿二日  
 金平小六  
 腹中  
 傷め

用等よ  
 下最  
 安慰教示備

その夜より一はは  
 文膳物暇りかこりるく  
 丹の病赤を隠すも離れぬ  
 玉神俊へ夜な  
 費件一若て候  
 下方ありやうその  
 杉屋に在るる  
 凍る水とある既  
 中平衣をまき  
 このまきと  
 依るまき

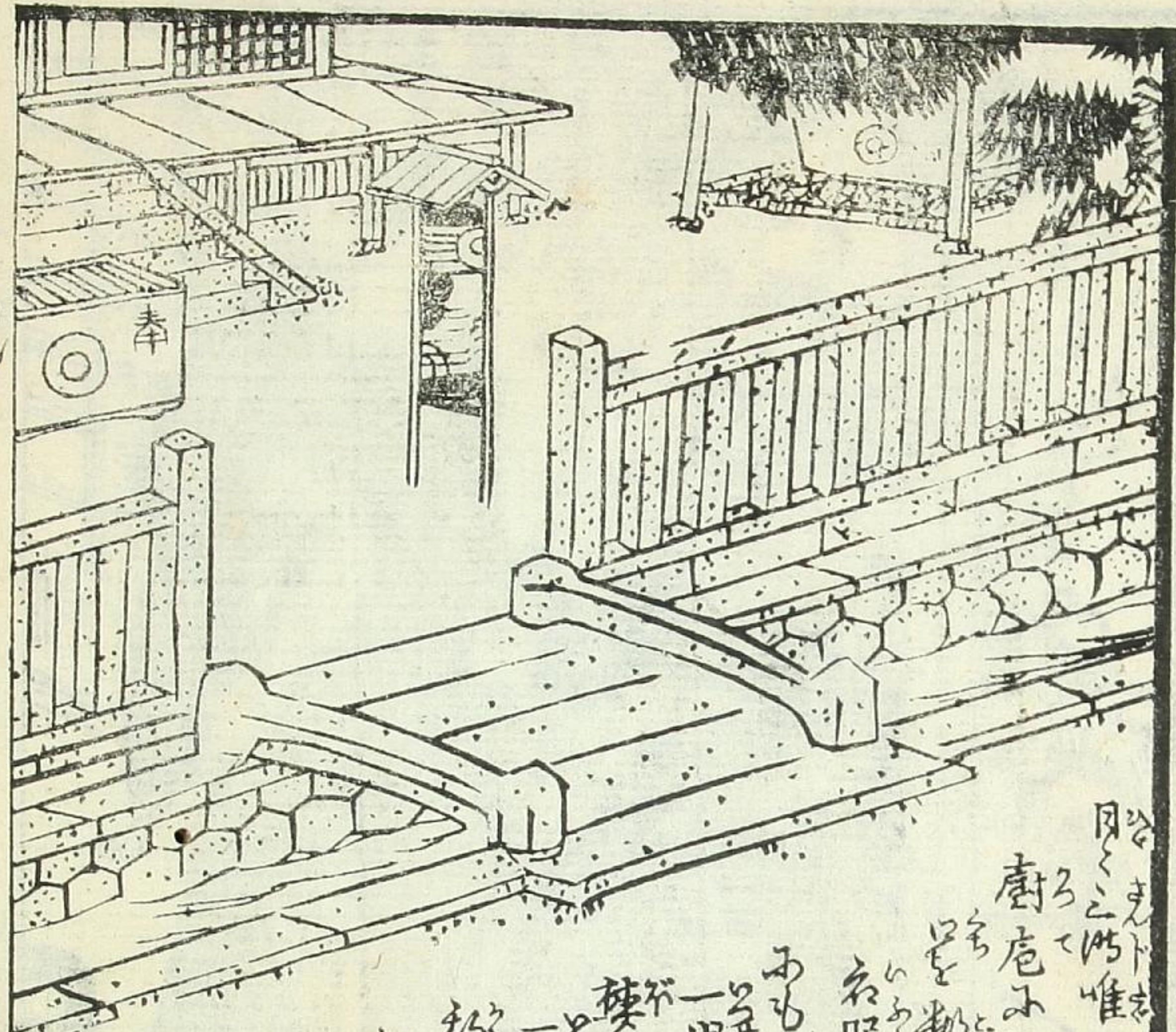


心腹と推  
 病さ  
 病腹心気と  
 運も進利の  
 久とせり  
 殊も  
 万彼の若  
 母の疾痛と  
 中よりの  
 中よりの  
 中よりの  
 中よりの

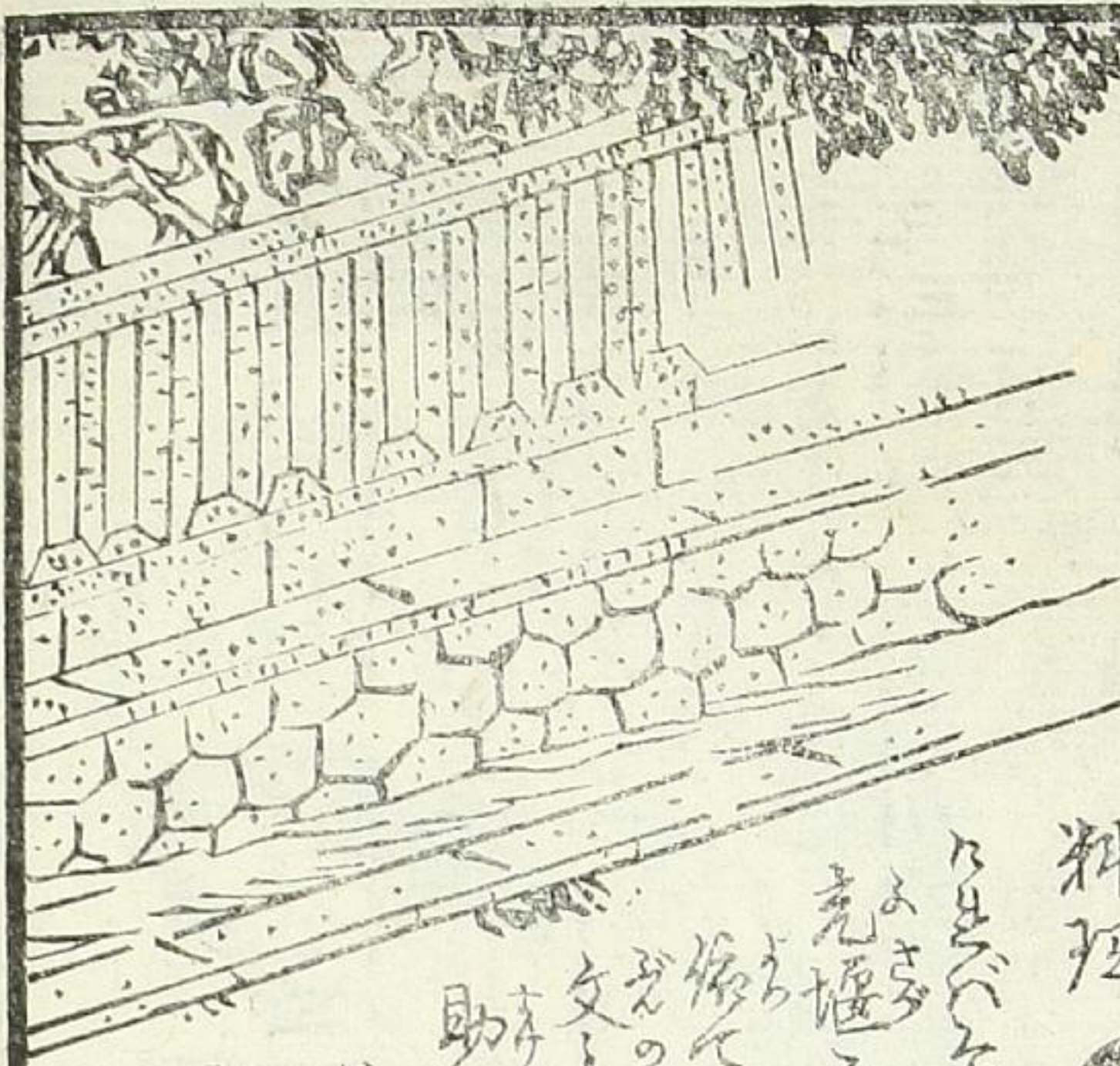
心腹と推  
 病さ  
 病腹心気と  
 運も進利の  
 久とせり  
 殊も  
 万彼の若  
 母の疾痛と  
 中よりの  
 中よりの  
 中よりの  
 中よりの







月々唯唯晒るの  
 厨下より父の  
 衣履の被褥も  
 一銭の利も貪  
 榊らで忠義  
 一団に執りたる  
 秋の此者と  
 一家中と  
 妻はなやと  
 お豊は淡々と  
 後茶の家持の  
 先妻とて  
 家の中は  
 忠義の  
 一銭の利も貪  
 榊らで忠義  
 一団に執りたる  
 秋の此者と  
 一家中と  
 妻はなやと  
 お豊は淡々と  
 後茶の家持の  
 先妻とて



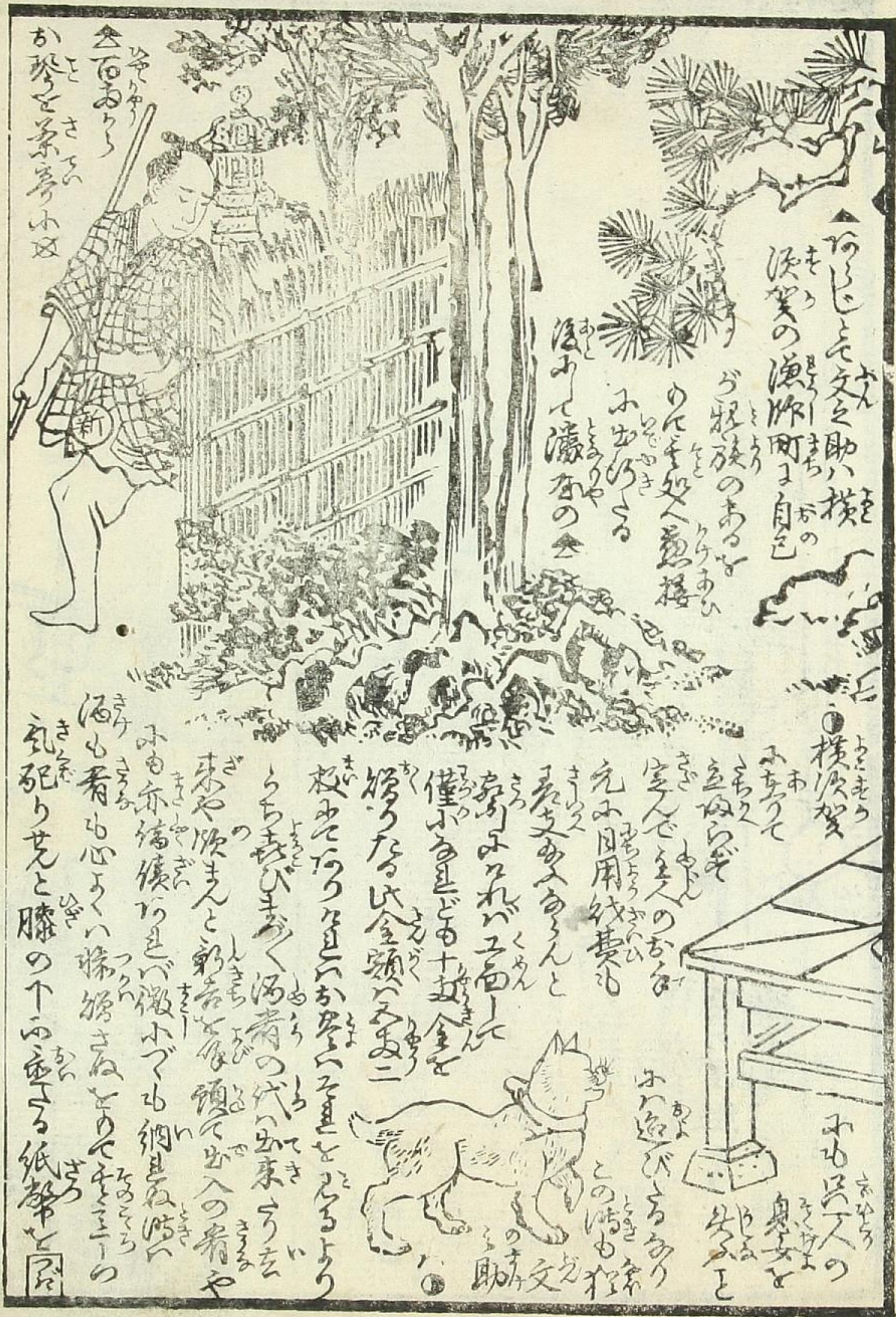
又晒る家の忠義の  
 形を漢文の助ける  
 けり脱ふ土着と改筆

▲殿にて貸長を速く  
 とう漢文の助  
 若器とて  
 まき貸  
 料理  
 料理

忠奮る一  
 家守  
 の備  
 程の恩顧  
 忠奮る一  
 家守  
 の備  
 程の恩顧

忠奮る一  
 家守  
 の備  
 程の恩顧

忠奮る一  
 家守  
 の備  
 程の恩顧



か ぼんざう ぶらり せい

ひししと 文之助の 横 矢 賀の 漁師 町は 自己

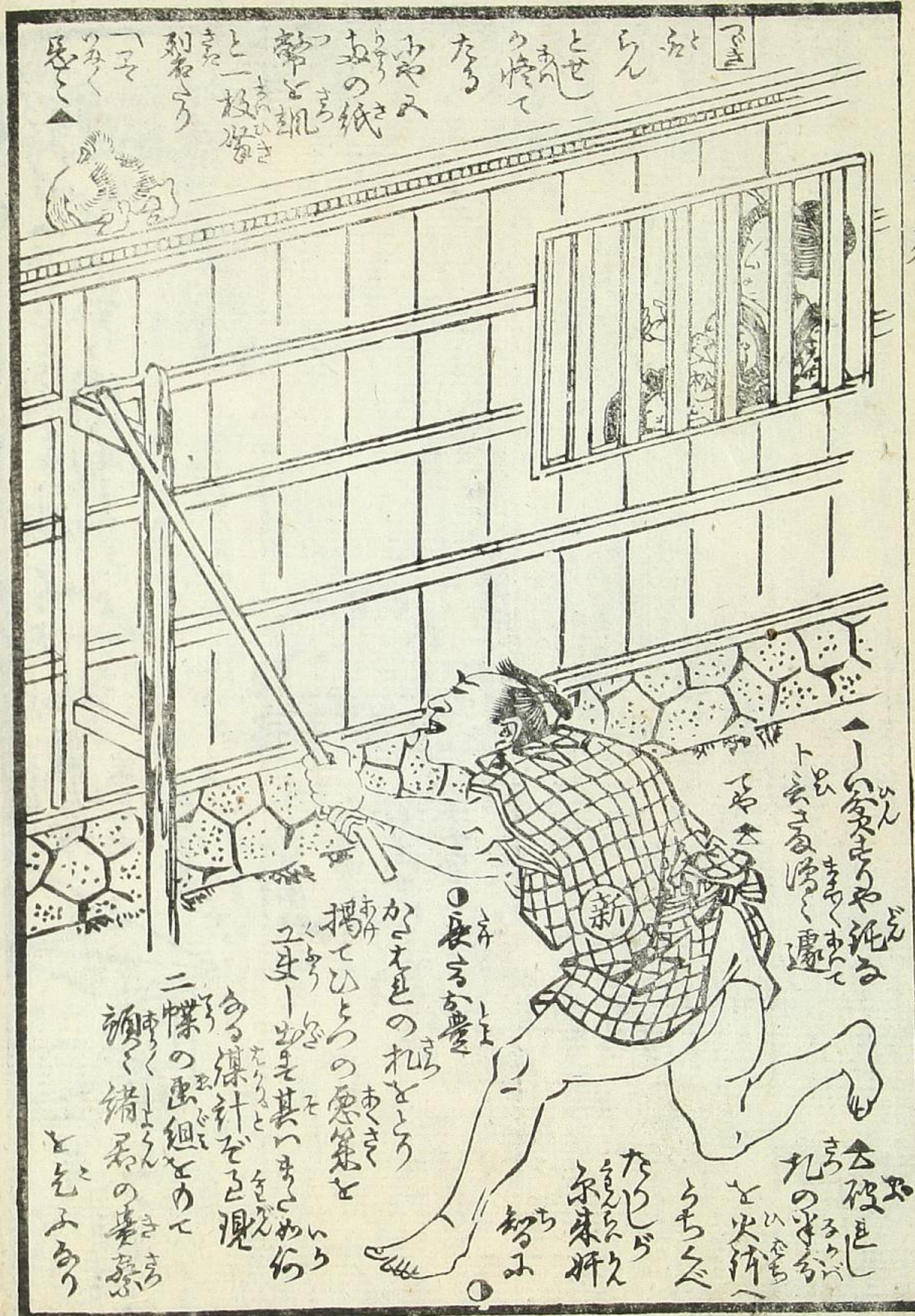
酒も 肴も 心ゆく 杯 揚さぬ とも せし 三の 乳 死り 兎と 膝の 下 紙幣を

横 矢 賀 文 之 助 犬



つ ぎ つ ぎ 文 之 助 の 納 袋

文 之 助 の 納 袋 手 紙 封 筒



一三  
 裂若  
 帯と紙  
 少の紙  
 たる  
 せ  
 見え  
 一三

小倉山 青樹榮 昔日新話

泉竜亭是正作 初編より追々出版

這ハ徳川家の旗下の青木弥太郎小倉菴長吉唱技  
 賑ハ小春情の事寄暴借強護の悪事青木の細若難  
 辛苦ホと記 繪入の草及紙綴りされ道世の珍書也

假名手本忠臣藏

露光作 芳虎画

延壽百人一首

中本一冊 玉蘭齋画

白縫物譚

初編より六十二編まで刊成  
 故人種員稿種彦作  
 宗叔角壽堂主人當今  
 日、抄支社主老後編と  
 出板すつみ版の老とら  
 月氏ふとん板店より一層  
 念入りつさ板を看書方  
 陸續以来と伏て書ふ  
 明治十年 板元致白

地本錦繪問屋

日本橋通三丁目四番地  
 延壽堂 林 九屋鉄次郎板元

